世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

Construction of Sacred Places around Asia under Japanese Power and Establishment of Nikka-Shinzen Kusabi-Kannon Hōsankai and Daitōa Kannon Sangōkai

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大澤, 広嗣 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1722

Construction of Sacred Places around Asia under Japanese Power and Establishment of *Nikka-Shinzen Kusabi-Kannon Hōsankai* and *Daitōa Kannon Sangōkai*

ŌSAWA Kōji

Summary

Hōsankai 奉賛会 or *sangōkai* 賛仰会 (service associations) supported the activities of Japanese Buddhist organizations. These associations had a support group that assisted religious activities and acted to achieve political objectives through war.

This paper focuses on two organizations that collaborated in the construction of the Greater East Asia Co-prosperity Area. The first is the *Nikka-Shinzen Kusabi-Kannon Hōsanka*i (Service Association for the Avalokiteśvara of Japan - China Friendship), which was involved with the Zōjōji temple in Tokyo and was chaired by KOISO Kuniaki of Japanese Imperial Army General. The second is the *Daitōa Kannon Sangōkai* (Service Association for the Avalokiteśvara of the Greater East Asia Kannon), which attended to the Sensōji Temple and was headed by OGASAWARA Naganari of the Japanese Imperial Navy Vice Admiral.

These two associations planned to build temples and sacred places on pilgrimage routes, aiming at the spiritual union of Asian populations who believed in the bodhisattva Avalokiteśvara, a familiar figure in Mahayana Buddhism. These temples in Tokyo were founded by the service associations in collaboration with the government policy to expand the influence of Buddhism in Asia and take advantage of the religious authority and Buddhist beliefs of Japanese military officers.

霊場建設と日本勢力下のアジア
——日華親善楔観音奉賛会と大東亜観音讃仰会の成立——

大　澤　広　嗣

霊場建設と日本勢力下のアジア

――日華親善楔観音奉賛会と大東亜観音讃仰会の成立――

大澤広嗣

〈キーワード〉小磯国昭／小笠原長生／満洲（中国東北部）／華北（中国北部）／巡礼

はじめに

宗教団体では、活動の賛助や支援をする関連組織を置く場合がある。「奉賛会」（奉讃会）又は「賛仰会」（讃仰会、鑽仰会）、「崇敬会」などと呼ばれ、仏教寺院では前二者を名称に用いることが多い。これらの組織は、宗教団体とは別個に設立して、在家信者の主体、又は教師と信者が共同で運営するなど、その活動形態は様々である。

かつて昭和戦時期に活動した奉賛会及び賛仰会は、宗教活動を支えるだけではなく、戦争遂行のため政治的な目的で活動するところがあった。例えば、聖徳太子奉讃会は奈良の法隆寺の活動を支えたが、戦時中は日本精神の象徴としての太子を宣伝した。真如親王奉讃会は、日本が占領したシンガポールに親王の大仏建設を目指していた(1)。

本論では、政治的な目的を含んだ奉賛会及び賛仰会を取り上げる。事例として、「大東亜共栄圏」建設に協力する宗教施設や巡礼霊場などの建設に関わった、観音信仰に基づく二団体を見る。第一に陸軍大将小磯国昭（一八八〇～一九五〇）が総裁を務めて浄土宗増上寺が関与した「日華親善楔（くさび）観音奉賛会」、第二に海軍中将小笠原長生（一八六七～一九五八）が会長を務めて天台宗浅草寺（現・聖観音宗の総本山）が中心となった「大東亜観音讃仰会」である。

課題設定の理由を述べる。仏教には、特定の如来や菩薩に対する信仰の諸形態があるが、両団体が関わる観音信仰は、『妙法蓮華経』の「観世音菩薩普門品第二十五」にて、その救いが説かれる。慈悲を象徴する仏ゆえに、宗派を問わずあらゆる人々に広く信仰されてきた。軍人の中にも観音を信じる者が多くいた。著名な例では陸軍大将の松井石根を想起するが、本論の事例と異なる点がある。松井は、個人の発願で静岡熱海に興亜観音を建立した。本論では、仏教界及び宗派内で政治的な影響力を持った大本山級の寺院による動きを、事例に論じるものである。戦時下の宗教団体は、これらの外郭団体を作ることで、教師と信者のみならず、時に政府や軍部を巻き込んで、宗教を通じた文化工作やプロパガンダを展開することができた。寺院側では、僧俗一体の事業であることを演出したのである。

本論表題の「霊場建設」について、日華親善楔観音奉賛会は東京にて観音堂を建立し、大東亜観音讃仰会はアジア各地に観音巡礼霊場の建設を目指した。いうまでもなく、これらは宗教活動とはいえ、「大東亜共栄圏」の建設協力という強いメッセージを込めた、モニュメントの創出運動であったのである。

なお両団体とも、日本軍の将校が関わるが、旧軍の制度において将校は現役を引退して予備役になっても、終身官として官職名の使用と待遇がなされた。本論で取り上げる小磯と小笠は、予備役の編入以降のことである。

近現代日本の宗教史研究において、従前の成果では、宗派や寺院、僧侶や信者などを視点に議論が展開されてきたため、活動を支援した奉賛会等は、大事な存在ながらも、研究の視野から抜け落ちてきた。観音信仰に注目した研究は多数あるが、本論で取り上げる日華親善楔観音奉賛会及び大東亜観音讃仰会については、限られた言及しかなかった[2]。

以降に本論では、戦争という非常時における、奉賛会及び賛仰会の宗教活動について考察を行うものである。

一　日華親善楔観音奉賛会の事前準備

（1）南京での観音発見から小磯邸の安置まで

日華親善楔観音奉賛会は、中国で観音像が見つかったことから始まる[3]。日中戦争の勃発を経て一九三七（昭和一二）年一二月、日本軍は南京を占領した。翌年五月、南京郊外の中山陵（孫文墓）南方にて、日本軍部隊は中国軍が築いた防護陣地にある塹壕の排水作業を行っていた。ある兵士が鍬を振り下ろしたところ、土中から偶然に観音像が発掘された。高さ八寸（約二四センチメートル）の象牙製の観音像で、南京特務機関が保管した[4]。同じく南京で玄奘三蔵の遺骨が一九四二年に発見されるが、やはり日本軍の土木工事の際であった。

一九三九年二月、東京市麻布区芝森元町（現・東京都港区東麻布）の小磯邸に、日華文化研究所の総務理事であり軍属の佐藤清作が、中国から訪ねてきた。南京から観音像を携えての一時帰国であった。しかるべき人物に託すべく、実業家の成富道正に相談したところ、小磯の推薦を受けたという。しかも佐藤は、杭州霊隠寺住持の呉済時の鑑定による、仏像が由緒ある旨の証明書を持っていた。小磯家では、毎朝仏前で読経すること

を知っていた成富は、小磯が熱心な仏教徒だと思っていたようだ。

佐藤から経緯を聞き、小磯は説明した。読誦するのは、実子六人を亡くし近年は両親が没した供養のためであり、「特別に熱心な仏教信者といふのではない」[5]という。それでも差し支えがなければ預かり自邸仏壇に安置して毎日勤行するが、盗難があっても責任を負わず、もし自分が他所に奉安する時は対応の一任を条件に出した。佐藤はこれに快諾する。以降、小磯家では観音像がある仏壇前で供養を行った。

その後、小磯の知人が、「霊媒者といふのか、神がかりといふのか、宮崎県出身」[6]の人物と訪ねてきた。その者に、観音像の取り扱いを聞いたところ、観音像を奉安する堂宇の建立を進言された。建設計画の即断を求められた小磯は、その場で実行を明言したという。

陸軍大将である小磯は、先の一九三八年七月に予備役となっていた。一九三九年四月の平沼内閣で拓務大臣となり、米内内閣でも留任され、一九四〇年七月までその任にあった。

（2）日華親善楔観音堂の建設準備

小磯は、固く決心した。知人が帯同した人物は、平素から交際がないとはいえ、観音像を作ると約束したのに反故にするのは、自身の気分が損なうと考えた。ついに、観音堂の建立を発願したのである。

前記した「特別に熱心な仏教信者といふのではない」とは、敗戦後に書かれた自叙伝からの記述ではあるが、山形県の士族出身である小磯の「家は仏教徒で代々日蓮宗」[7]であった。専門誌『宗教公論』の記事によれば、観音像の受贈を受けた頃の小磯は、「之を持仏室に安置し、朝夕参拝せる内、或る霊感を得て、之を私仏となすに忍びず、普く天下に公開して、日華親善の楔ともして奉斎すべく発願」[8]したという。熱心な仏教信者ではないとは、小磯の謙遜であろう。自宅内には天照大神を祀る邸内社があり、著名な神道家である今泉定助を招

き鎮座祭を行うなど、神仏を篤く尊崇していたのである。[9]

小磯は、観音堂建設の原案を考えた。伽藍は奈良の法隆寺夢殿（本尊救世観音）をモデルとして、建設資金の勧募を行い、候補地は東京市所管の浅草、上野、芝の三公園のいずれかとした。調達資金のうち建設費の残額は今後の維持費として、建立後は堂宇とともに東京市への寄附を計画する。同市長の大久保留次郎に相談したところ、市民局公園課長の井下清に話を通し、敷地は増上寺のある芝公園内が割り当てられた。小磯の遠縁者の仲介で、建築家の内藤多仲に設計を依頼して、佐々木孝之助が建設を担うことになった。佐々木の父岩次郎は帝室技芸員で、かつて増上寺大殿（一九二二年竣工）の設計に関与したので、親子二代で同寺の伽藍造営に関わることになる。

小磯の自伝には、仏教界の関与は述べていないが、『宗教公論』は詳しく伝える。一九四二年一月上旬に芝公園内の料亭紅葉館にて、小磯は仏教各宗派の代表者と井下清等を招待して協力を依頼した。参加者からは、当該観音堂の建設が仏教教化運動として適切であると賛成の意を表し、特に「遠く大陸の郷土より笈を負ふて皇都に学ぶ、〔中華〕民国留学生の望郷心に訴ふる聖財として、此の尊像を東京芝公園地内に、八角堂を建て、安置すること、致したいとの〔小磯〕閣下の発願」[10]が全面的に承認され、市公園課も異議なく了解した。竣工後には仏教各宗派が輪番で住職を担当することになった。

一九四一（昭和一六）年一二月付けで、小磯の名義で趣意書を作成した。書面に次の文言がある。

事変に戦没した日本将兵は護国の神として靖国神社に合祀されますから、幾分冥ずることが出来ると思ひますが、之に反し中華民国将兵の英霊のみは何処に往くべきやも判らず、彷徨ひ居る有様です。之を其の儘に放擲して顧みぬことは、東亜共栄圏の確立を目指して進む吾等日華同人の到底忍び得ない所でなければなりませぬ。／……就いては今回同人胥（あい）謀り浄財の喜捨を受けて一観音堂を建立し、其処に此の九寸

像を安置して之に戦没日華将兵の英霊を合祀供養致しましたならば、事変に依つて醸された日華両国民相互の怨恨を幾らかでも払拭する上に貢献し、又以つて東亜民族共栄の礎ともならうかと信ずるのであります。[11]

先の記事では「民国留学生の望郷心に訴ふる聖財」とあり、趣意書に中国側も含めた戦死者を慰霊するとされ、まさに日本と中国の共存共栄を目指す、親善と追悼の霊場を目指したのである。

観音堂は一棟だけの建設のため、多額の資金を必要としなかった。一般からの寄附は行わず、一口千円以上の大口だけを受付け、各財閥や仏教界、実業家、小磯の知人などに呼び掛けて、一九四二年五月までに建設資金二五万円を調達した。

しかし戦時下のため、建設資材が統制され、希望する荘厳な建築物には仕上がらない見込みから、ひとまず暫定の仮堂とし一九四三年六月に着工した。観音堂の場所は、増上寺境内の五重塔西北側の広場となった。現存する丸山古墳の近くである。実業家で茶人の横井半三郎の意見で、観音像は秘仏とすることにした。通常の寺院に安置されるような、人々が自然と拝む荘厳な様貌ではなかったからである。そこで秘仏に前立仏を安置すべく、高村光雲に師事した彫刻家の山崎朝雲に観音像の制作を依頼して、小磯により、それぞれを「日華親善楔観音」と名付けた。『朝日新聞』は、写真付きでこの観音像を紹介する。如意輪に見える円状の光背を持ち、足を曲げない全跏趺坐の状態で椅子に腰を掛けた倚像に見える（図1）[12]。記事は特記しないが、南京で見つかった観音像ではなく、山崎が刻んだ前立の観音像であろう。

小磯は、首相の東条英機からの要請で、一九四二年五月に朝鮮総督へ就任した。京城（現・ソウル）に着任した後に、庁舎裏手にある朝鮮総督府美術館での展示会を視察する機会があった。朝鮮文化に詳しい同府編輯課嘱託の加藤灌覚の制作による、夢殿を模した楽浪塗厨子が出品されていた。まさに観音堂に納めるのには最

日華を結ぶ楔觀音
大陸の戰場から芝增上寺へ

図１　『朝日新聞』に掲載された日華親善楔観音

適で、直ぐに財団へ連絡して購入したという。

興亜観音を建てた陸軍大将の松井石根は計画を聞き、小磯に多数の白骨を託した。大陸の戦場で日中のどちらかも判然としない遺骨を埋葬供養すべく、松井は知人から預かっていたのである。小磯は承諾して、観音像の厨子直下に埋葬した。

仮の観音堂は朱塗りで、一九四四年三月までに完成する。正面に掲げた扁額の文字は金泥で「日華親善楔観世音」とあり、東晋の書家である王羲之の拓本から取られた字体であった。

二　日華親善楔観音奉賛会の組織と活動

（1）増上寺での入仏式

日華親善楔観音は、一九四四（昭和一九）年五月一四日に浄土宗大本山増上寺内の日華親善楔観音堂で入仏式が行われた。外交儀礼上、一旦は中華民国国民政府（汪兆銘〈汪精〉政権）に仏像を返還して在京大使館に安置することとし、改めて日本側に贈呈されることとなった。当日午前に、大島徹水（増上寺法主）の導師で法要が進む。奏楽に乗せて蔡培（中華民国大使）が入場して、小磯国昭に目録が贈られた。祝辞は蔡培、青木

一男（大東亜大臣）、酒井日慎（大日本仏教会会長）であった。法要には名士ら二〇〇余名が参加した。[13]

入仏式に先駆けて、「財団法人日華親善楔観音奉賛会」が大東亜省所管の民法法人として設立された。小磯は、大日本仏教会の役員に相談して、その斡旋で奉賛会を設立したが、[14]「観音堂ノ維持ハ勿論、進ムデ日華親善同生同死ノ実ヲ挙グルガ為メノ文化工作ニモ乗出ス方針」[15]から法人化した。当時の大日本仏教会は、各種の工作活動を行っていたが、財務基盤の安定下のために財団設立を助言したのである。小磯は多忙のため、元住友銀行幹部で、当時は戦時金融公庫に勤務していた名村豊太郎を法人運営の代理人とした。

観音像の今後の管理について、事前に申し合わせを行っていた。合意は、奉賛会・増上寺・大日本仏教会の三者で行われ、立会者は文部省の官僚であった。[16]内容は、財団から運営の諸経費を支出するが、増上寺に境内仏堂として管理を一任するもので、仏教宗派を保護・監督した文部省が後見したものである。大日本仏教会は全宗派を代表して、財団と増上寺の関係に「相共ニ協力シテ観音信仰精神ヲ以テ日華親善ノ実ヲ挙グルコト」と賛同したが、年次の大法要の際には各宗派管長が輪番で導師として執行し、「其ノ場合増上寺ト円満ナル協力ヲ旨トスルコト」[17]との条件が付いた。

ここに楔観音を奉安する増上寺と、各宗派が参加する大日本仏教会の間に、競合と調整があったことを窺い知る。共同管理の寺院の前例として、明治期にシャム（タイ）から仏舎利が贈呈され、愛知県に建立した日暹寺（日泰寺）がある。関東と関西の有力寺院の間で、誘致運動が過熱したが、解決せず和解策として中間の名古屋に建てた。住職は各管長での輪番とする超宗派の寺院である。つまり楔観音の場合、「日華親善」という国家と国策の共通目的が込められた仏像を、増上寺だけが独占することに異議を唱えた宗派がいたのである。

入仏式で、発願主の小磯が祭文を読み上げた。観音に込めた日中友好への願いが分かる部分を見る。

惟ふに本尊像は、畢竟日支両軍の縁に繋がり世に再現せるものにして、日華親善回生共死の宿命を、両

者の楔となりて衆生に暗示せられたるものと観るへく、後須叟にして南京に中華民国新政府の出現を見、日華の親善日に敦く、相携へて巨歩を大東亜戦争の完遂に進むるに至れるも亦宜なりと謂ふべし。……本日を卜して特に貴顕有志諸彦の御参列を得、恭しく入仏入眼の式を挙行するに方り、菩薩の弘誓尚くは正に世音を大観して大東亜建設の彼岸到達を十全ならしむる為、益々日華の親善敦厚を冥佑せられんことを。[18]

以降、毎月一四日に在京の関係者が集まり、増上寺僧侶の読経で供養を行った。辞職した東条内閣の後を受けて、小磯は一九四四年七月に内閣総理大臣となる。戦局打開を目指したが好転せず、一九四五年四月に退陣して、鈴木貫太郎が後を継いだ。小磯内閣は観音奉賛活動と共に、長くは続かなかった。

（2）敗戦から財団解散まで

東京での空襲が激しくなり、財団側が増上寺に相談したところ、楔観音像二体は、境内にある石造の納骨堂にて仮安置することになった。一九四五（昭和二〇）年五月二五日の空襲で、増上寺は境内正面の三解脱門などを残して、大堂や徳川家霊廟、五重塔など多くの境内建物が焼け落ちた。小磯によれば、観音堂は残ったが、増上寺の近隣にある自邸は焼失したという。[19]

敗戦後に小磯は、A級戦犯容疑で逮捕された。貨幣価値が下がり、財団では基金の利子以外は収入がなく運営は困窮する。獄中の小磯は、関係者と相談して、一九四九年に増上寺へ観音像と厨子、建物、基金を寄附して、財団法人の解散を指示した。終身禁固の判決を受けた小磯は、翌年に獄中で没した。しかし財団の清算は、世情の混乱から法的な手続きを完了せず、法人格だけが残った。

時間は大きく流れ、財団法人日華親善楔観音奉賛会は、二〇〇三（平成一五）年一月二一日付けで、主務官庁である外務大臣から「法人設立許可取消処分公告」が出され、法人格が解散した。[20] 同日に外務大臣が解散さ

せた他の法人は、財団法人興亜書道連盟、社団法人満鉄社友会、社団法人日華労務協会、医療を行った財団法人の同仁会であった。これらの団体も奉賛会と同じように、敗戦後は対アジア事業の目的を失い、長く休眠法人になっていたのである。

三　大東亜観音讃仰会の事前準備

（1）会長の小笠原長生

続いて、海軍中将の小笠原長生が会長を務めた「大東亜観音讃仰会」を取り上げる。小笠原家の宗旨は日蓮宗で、特に長生自身は観音信仰に熱心であり、仏教及び観音に関する著述が多い[21]。

讃仰会の会長就任に際して小笠原は、「余は多年仏教を奉じ観世音菩薩を信仰してゐる故に先般浅草寺〔貫首〕大森〔亮順〕大僧正、塩入〔亮忠〕僧正等から大会々長の推薦をうけたので、他に適任者もあると信ずるが一応喜んで承諾した次第」[22]という。

会長就任の詳しい経緯は、後年に小笠原が寄稿した大森への追悼文にある。それによれば、会の規約の成立後、大森から「自分が副会長として助力するから、私に会長を引き受けろ」との推薦があったという。「私〔小笠原〕は本より其の任でないから、固辞したのであるが、強てのお薦めに否みがたく、遂に上人の御前立になる覚悟」で引き受けた。「一から十まで、副会長たる上人にお任せして、総て其のお指揮に従ひ、或は旅行を共にし、或は前後して演壇に立つ等、分に応じて相当奉仕したのであるが、惜しむらくは此の浄業も、実現に至らず終戦と共に解散するの已を得ざるに至つた」[23]と述懐する。

以前から観音を信仰していた小笠原は、聖観音を本尊とする浅草寺住職の大森からの強い勧めであれば、引き受けざるをえなかったことが分かる。浅草寺と海軍中将による協働の背景には、相互に宗教的な動機がありながらも、「大東亜」建設を仏教界のなかで先導しようとする同寺側の意図があったのである。

（2）大東亜観音讃仰大会

大東亜観音讃仰会は、一九四三（昭和一八）六月一二日に、東京九段の軍人会館（戦後は九段会館）にて大東亜観音讃仰大会が開かれたことに始まる。

大会は、当日の午後に開会され、国民儀礼に始まり、大森亮順を導師に「大東亜戦争完遂祈願戦没将兵追悼法会」が行われた。松井の祈願文、小笠原の大会趣旨、酒井日慎の讃辞があった。祝辞として青木一男（大東亜大臣）、岡部長景（文部大臣）、蔡培（中華民国大使）、王允卿（満洲国大使）、ディレック・チャイヤナーム（タイ王国大使）、安藤正純（大日本仏教青年会連盟理事長）から述べた。日本百観音を代表して平幡照法（千葉銚子真言宗円福寺）が祈願文を読み、「興亜仏教の歌」がホールに響いた。その後に、橋本博（毎日新聞特派員）の講演「ガダルカナルの血戦談」、映画「空の神兵」等が上映されて閉会となった[24]。

大会では、活動の計画が発表された。主たる事業は、（一）大東亜観音三十三霊場の選定で、関連事業として、（二）各国語による観音経を編纂出版、（三）機関誌の発行、（四）各民族の戦死者及び殉職者のために観世音菩薩を奉安する供養堂塔寺院を建立、（五）大東亜観音運動の指導者の養成機関設立、（六）各国間での学僧の交流による学術・思想・文化の発展、（七）在家信者向けに研修機能を備えた施設建設と同所での教化・社会・文化事業、（八）図書館と研究機関の設置を計画した[25]。霊場の設置は、戦没者の供養の意味合いが含まれていたことが分かる。この大会は、アジア各地の仏教者への呼びかけを前に、まずは日本側で発起した会同

であった。

讃仰会の最大の目的は、日本の観音霊場をモデルにして、日本勢力下の満洲、蒙古、中国、タイ、ビルマ、インドシナなどの諸地域に跨がる巡礼霊場を建設することであった。ただし観音札所の霊場巡礼は、日本で独自に見られる文化形態である。「其の霊場を中心として仏教徒の提携を計り信仰を深めて大東亜聖戦の意義を理解せしめこれが目的の完遂を期すると共に東亜諸民族永遠の福祉を増進し観音信仰による大東亜新文化を建設」[26]と謳われた。

本事業は、表向きには日本百観音（西国・坂東・秩父）の各霊場が共同で発起者になり、大東亜観音讃仰会を設立したという。しかし実際には、坂東霊場の第十三番札所にして、仏教界での有力寺院の一つである、浅草寺が本大会の企画を牽引したのである。また当初から讃仰会事務局の名義は、大日本仏教会内に置いた[27]。形式上は仏教各宗派の共同運営とするためであるが、実際には浅草寺に事務機能があった。浅草寺では、以前から傘下に関係団体を設けていた。一九二八年設立の財団法人浅草観音大慈会（現・一般財団法人）は、同寺での社会や福祉の事業を支援するためで、讃仰会とは直接の関係はない。既存の観世音世界運動本部は、観音信仰の普及を目指していたことから、讃仰会の運営に関わりを持っていた。

（3）大東亜仏教青年大会

その後は、アジア側からの賛同を得るべく、大東亜仏教青年大会で霊場建設が提案された。この大会は、一九四三（昭和一八）年七月四日から五日まで、東京丸の内の大東亜会舘（現・東京会舘）で開かれ、主催は大日本仏教青年会連盟、後援は大東亜省、文部省、鉄道省などであった[28]。ただし大東亜観音讃仰会の主催ではない。大会では、アジアからの仏教青年が参集したが、指導する壮年以上の仏教者も参加して、「共栄圏内青年

仏教徒の総意総力を結集し、仏教を通じて大東亜戦争完遂に協力し、大東亜建設に邁進せん」[29]との目的で挙行したものである。

大会は、満洲国代表の釈禅定ほか一三名、中華民国から華北代表の周叔迦居士ほか七名、華中から仁山法師ほか七名、華南から会覚法師と鉄禅法師ほか四名が集い、これらの地域や南方からの留学生代表など三〇余名、国内から四百余名が参加した。

大会では、大東亜仏教青年会の結成、その総本部の東京設置など、重要な議決が行われた。決定の一つが、大東亜観音三十三霊場の設置と大東亜観音讃仰会の結成である。讃仰会は、すでに日本側だけで準備を行っていたが、讃仰会主事の壬生照順によれば、「この要件は、……委員会（宮本正尊師が委員長）に於て審議され満洲国代表その他の賛同によつて通過され、総会に於ては安藤会長自ら報告し満場一致で可決された」[30]という。

なお本大会を経て、大東亜仏教青年会の総本部創立総会は、一九四三年一二月一九日に大東亜会館で開かれ、初代会長に安藤正純が推挙された。

四　大東亜観音讃仰会の組織と活動

（1）創立式

大東亜観音讃仰大会の開催及び大東亜仏教青年大会の決議を経て、大東亜観音讃仰会では霊場建設に向けて、本格始動した。

一九四四（昭和一九）年六月一一日の午後一時から、浅草寺の観音堂にて大東亜観音讃仰会の創立式と聖戦

必勝大祈願会が行われた。創立式では、国民儀礼、大森亮順の導師による法要、小笠原長生の祈願文奉読、酒井日慎の祝辞があった。来賓代表として、松井石根、高階瓏仙（曹洞宗管長）、大島徹水が献香をした。最後に、讃仰会副会長の荒木良仙（真言宗長谷寺貫主）による式終了の挨拶があった。式典と同じ時間帯には、全国の観音百霊場でも一斉に必勝大祈願が行われた。

続いて関係者は、浅草寺から大東亜会館に移動して、同日の午後三時から大東亜観音讃会創立総会が行われた。塩入亮忠の経過報告、小笠原長生の会長挨拶、大森亮順から事業計画が説明された。祝辞として文部大臣の岡部長景（文部省宗教課長の吉田孝一代読）、蔡培と王允卿と安藤正純による祝辞、松井石根の発声による聖寿万歳などがあった。午後五時から別室で、披露会が行われ、蔡と王の両大使を初め、松井、安藤、下村寿一、立花俊道、長谷川良信からの発声があり、午後七時に閉会した。[31]

（2）設立趣旨と会則、役職員

大東亜観音讃仰会の組織を見たい。重要な情報なので、長くなるが紹介する。創立総会では、「大東亜観音讃仰会設立趣意書」が示されたが、「設立趣旨」の一部を見る。

道義ニ基ク世界新秩序ヲ建設シ、共栄圏民族ノ共同宣言ノ実現ヲ期スルハ、我等ノ歴史的重大使命ナリ。而シテ此ノ使命完遂ノ為ニハ大東亜共栄圏ノ確立ヲ期シ東亜諸民族ノ精神的融合団結ヲ図ルノ要アリ。而モ其ノ根本要務ハ東亜民族共通ノ信仰タル仏教、特ニ最モ広ク最モ長ク信仰サレ、現ニ東亜民族ノ本然ノ姿トモ云フベキ観音信仰ニ依ル同信共栄ノ信念ノ昂揚ヲ図リ精神的結合ヲ期スルコトガ最モ重要ナルコトナリト信ズ／観世音菩薩ハ正法ヲ照窮シテ無縁ノ大悲ヲ垂レ、大誓願ヲ発シテ衆生ヲシテ無怖畏ノ国土ニ遊バシメント、随処ニ三十三身ヲ現シ、不断ニ度生ノ大法輪ヲ転ジ給ウ／我等ハ八紘為宇ノ大道ヲ大東亜

ニ実現セン為、大悲観世音ノ誓願力ヲ仰ギ、生ヲ数々此間ニ託シテ勇敢精進以テ大道ノ実現ヲ期セントス[32]

つまり「東亜民族共通」に広く信仰される観音信仰を中核にして、アジアの「精神的結合」を意図したのである。大東亜観音讃仰会の組織について、会則を見てみよう。

大東亜観音讃仰会会則〔抄〕

第一条　本会ハ大東亜観音讃仰会ト称ス

第二条　本会ハ事務所ヲ東京都芝区芝公園第二号地大日本仏教会内ニ置ク但シ会長ハ必要ニ応ジ別ニ事務連絡所ヲ設クルコトヲ得

第三条　本会ハ大東亜諸地域ニ於テ観音信仰ヲ鼓吹シ仏教精神ニ依リ東亜諸民族ノ同生共栄ノ理念ヲ昂揚シ興亜大業ノ完遂ニ努ムルヲ以テ目的トス

第四条　本会ハ前条ノ目的ヲ達成スル為左ノ事業ヲ行フ

一、日本ニ於ケル観音霊場ノ顕彰／二、大東亜地域ニ於ケル観音三十三霊場ノ設定勧奨及其ノ顕彰／三、大東亜戦争戦没者ノ追弔及之ニ関スル興亜観音堂又ハ供養塔建設ノ助成／四、大東亜諸地域内観音霊場ノ緊密ナル連絡交渉及其ノ教化機能ノ推進／五、機関雑誌及観音信仰ニ関スル図書ノ刊行／六、大東亜各要地ニ於テ毎年〔空欄〕回観音讃仰大会ノ開催並大法会ノ執行／七、前各号ノ外本会ノ目的ヲ達成スル為必要ト認メタル各種ノ事業

第五条　本会ハ西国、坂東及秩父札所並其ノ推薦ニ依ル観音霊場寺院ヲ発企人トシ本会ノ目的ヲ賛成シ入会シタル寺院、団体及信徒ヲ会員トシ之ヲ組織ス[33]

会則の第六条以降は省略するが、以下に組織の体制に関する条文が並び、概念図をまとめると次のようになる（図2）。

一九四四年時点の大東亜観音讃仰会の役職員は、次のとおりで、原文どおりイロハ順である（表1）。[34] 著名な学者、政治家、軍人、各宗派の僧侶が関わっていることが分かる。前述の日華親善楔観音奉賛会から、総裁小磯国昭が顧問、理事中川吉太郎が評議員に入る。

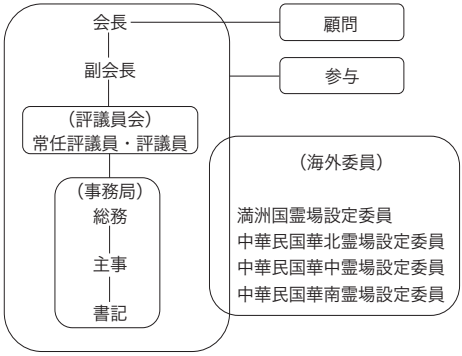

図2　大東亜観音讃仰会の組織概念図

五　大東亜観音讃仰会による大東亜観音三十三霊場

（1）上村真肇の審議用資料

大東亜観音讃仰会の開催に先立ち、仏教学者で大正大学講師の上村真肇（インド学者上村勝彦の父）が、共栄圏内の観音霊場の調査を依頼された。霊場調査の成果は、「大東亜諸地域観音霊場大観」と題してレポートを公表した。浅草寺子院の関係者である上村は、大東亜観音讃仰大会に際して、主催者側から観音霊場の選定に際して参考となる霊場又は遺跡を紹介するように依頼があった。[35] 上村は、天台教学を専攻とし、専門外ゆえに断りたかったが、大まかな概要で問題ないとのことで止むを得ず引受けた。実は、一九四一（昭和一六）年に上村がタイで史料調査を行った際に、バンコクの博物館に展示する観音像について報告するなど知見を有していたことから見込まれたものである。[36] 上村は、「思ふに観音は大乗菩薩中、古来最も広く拝まれた菩薩で、現在でも日本、中華民国、西蔵、蒙古、満洲、東京（トンキン）、安南（アンナン）、交趾（コーチ）、等各地に於て、熱心に拝まれてゐる次第である。……大東亜全地域に、大東亜三十三ケ所霊場を選定し、夫等、各霊場を中心とする信仰の交流をも企図する訳である」[37] との視点から選出

表１　大東亜観音讃仰会の幹部名簿

顧　　問	井上哲次郎（国際仏教協会長・文学博士）、一条悦子、福家守明（園城寺長吏）、常盤大定（文学博士）、鳥井信次郎、大西良慶（清水寺貫首）、大島徹水（増上寺法主）、大倉邦彦（大蔵精神文化研究所長）、大谷光照（本派本願寺）、大谷光暢（大谷派本願寺）、岡部長景（文部大臣）、小野清一郎（東京帝国大学教授・法学博士）、和田信房（海軍中将）、田村徳海（四天王寺貫首）、高橋三吉（海軍大将）、高階瓏仙（曹洞宗管長）、長沢徳玄（上野輪王寺門跡）、熊平源蔵、山田乙三（陸軍大将）、山本英輔（海軍大将）、松井石根（陸軍大将）、藤山愛一郎、小磯国昭（朝鮮総督）、近藤寿治（文部省教学局長）、五島慶太（運輸通信大臣）、青木一男（大東亜大臣）、安藤正純（大東亜仏教青年会長）、佐伯定胤（法隆寺貫首）、佐伯恵眼（醍醐寺貫首）、佐々木教純（護国寺貫首）、酒井日慎（大日本仏教会長）、坂下宗太郎（衆議院議員）、壬生雄舜（喜多院貫首）、結城豊太郎（外務省顧問）、下村寿一（東京女子高等師範学校校長）、平幡照法（円福寺貫首）、関口慈真（日光輪王寺門跡）、鈴木貫太郎（海軍大将・男爵）
評 議 員	今吉敏雄（大東亜省満洲事務局長）、岩本光徹（聖護院門跡）、井原寅松（浅草寺観音読誦会幹事）、井上宗俊（秩父札所会幹事）、宇佐美珍彦（大東亜省支那事務局長）、蜂須賀年子（日本婦人敬愛会会長）、蜂谷恵光（大東亜仏教青年会理事）、花山信勝（東京帝国大学教授・文学博士）、浜田本悠（立正大学教授）、丹羽悦道（秩父札所庶務委員・西国札所会幹事）、友松円諦（聖徳太子憲法讃仰会代表）、大妻コタカ（大妻高等女学校長）、太田信次郎（都会議員）、大久保源之丈（都会議員）、小川春光（秩父札所会幹事）、鷲尾光遍（石山寺貫首）、上条貢（都会議員）、立花俊道（駒澤大学前学長）、立花栄吉（東京急行電鉄総務）、高神覚昇（大正大学教授）、武内紫明、梅山英夫（大日本仏教会総務局長）、野路井教海（西国札所会会計委員）、黒田亮文（浅草寺内務部長）、安田力（大日本仏教会副会長）、山内正文（陸軍中将）、松平俊子（大日本女子仏教青年会理事長）、松本徳明（ボン大学名誉教授）、松尾長造（大日本仏教青年会事務局長）、前田広観（大東亜仏青理事）、町田広義（秩父札所会幹事）、水野梅暁、森田潮応（四天王寺執事）、福井康順（早稲田大学教授）、跡見李子（跡見高等女学校長）、天津忠道（坂東札所会幹事）、浅見宇市（秩父町長）、赤沼吉五郎（日進航器会社相談役）、峰堅継、美松寛海（弘明寺住職）、峯岸脊海（浅草寺執事）、水上義海（寛永寺執事長）、宮本正尊（東京帝国大学教授・文学博士）、篠原三千郎（東京急行電鉄社長）、清水祐之（大日本仏教会興亜局調査部長）、森大器（大日本仏教会興亜局連絡部長）、長井真琴（文学博士）、中川吉太郎（日華親善楔観音理事）、中川豊舜（大日本仏教会庶務部長）、中山理々（教学新聞社主筆）、田村寿（毎日新聞社事業部長）、吉田孝一（文部省教学局宗教課長）、吉水十果（国際仏教協会主事）、真渓涙骨（中外日報社長）、堤浄祐（文化時報社長）
参　　与	長谷川良信（巣鴨女子商業学校長）、中村教信（大日本仏教会興亜局長）、坂野栄範（大東亜仏教青年会理事）、柴原弘道（秩父札所会長）、清水谷善照（西国札所会総務委員）、鈴木常観（坂東札所会幹事）
役 職 員〔事務局〕	小笠原長生（会長・子爵）、大森亮順（副会長・浅草寺貫首）、荒木良仙（副会長・長谷寺化主）、塩入亮忠（総務・坂東札所会幹事）、壬生照順（主事）、上村真肇（機関紙編輯主任）、橋沢潔（書記）

したという。

上村は、レポートで寺名及び地名を挙げて、概要を紹介した（表2）[38]。日本内地と植民地の朝鮮はないが、同じく植民地の台湾は含まれる。当人が、「将来、霊場選定の件は委員を委嘱し選定委員会を設くる由」[39]と断ったのは、候補が多い地域では、霊場選出に際して寺院間の競合を生じかねず、無用の混乱を避けるため掲載を避けたものと見られる[40]。

表2　上村真肇「大東亜諸地域観音霊場大観」記載事項一覧

地　域	観音信仰の霊場・寺院・遺跡
日本内地	記載なし
朝　鮮	記載なし
台　湾	〈台北〉龍山寺、観音山、〈台南〉開元寺、法華山、竹渓寺
中華民国	〈北京〉天寧寺、臥仏寺、五塔寺、〈天津〉観音寺、〈河北省正定〉龍興寺、〈江蘇省南京〉栖霞寺、毘盧禅寺、〈浙江省舟山列島〉普陀山、〈浙江省杭州〉天竺寺、煙霞洞、〈浙江省〉天台山、〈山西省太原〉崇善寺、〈山西省五台山〉碧山寺、〈山西省〉天龍山石窟、〈河南省〉龍門石窟、〈甘粛省〉敦煌千仏洞
満洲国	〈新京〉般若寺、〈大石橋〉娘娘廟
蒙　疆	〈張家口〉雲泉寺
インド	〈諸説あり〉補陀落山（布咀落迦山）、〈〔サールナート〕〉鹿野苑、〈エローラ〔石窟群〕〉ケネリー窟寺〔第12窟カ〕、〈〔マハラシュトラ〕〉カンヘーリ〔石窟群〕
ネパール	「現在は金剛乗なるラマ教が行はれてゐて、勿論観音信仰も包含されている」
チベット	〈ラサ〉達賴法王の宮殿〔ポタラ宮〕
セイロン	古城アヌラダプラ遺趾
ビルマ タイ	「過去に於ては……大乗教が伝播した事もある故に、遺品や遺跡は若干ある」
仏　印	〈安南〉「観音は……本尊脇侍として安置せられる場合が多い」、〈カンボジア〉アンコール遺跡、バヨン寺〔バイヨン〕
マライ	〈ペナン〉グラヒ〔極楽寺カ〕の仏塔、蛇寺
スマトラ	「印度文化の影響の下……観音信仰も行はれた」
ジャワ	〈ケドウ州〉ムンドウ寺、ボロブドル〔ボロブドゥール〕、ジヤゴ寺（トウムパン寺）

（2）霊場設置の方針転換

讃仰会は、一九四三（昭和一八）年七月一五日に東京谷中の天台宗天王寺で、霊場の計画を発表した[41]。アジア全域に三十三か所の観音霊場を設ける構想である。「大東亜観音霊場設立趣旨」では、三十三か所のうち第一次分は、日本六、満洲三、中華民国一三、蒙疆二、その他一〇となる。合計すると三四か所があるが、一か所は番外寺院である。日本の六霊場は、讃仰会の幹部人脈からすれば、天台宗浅草寺と真言宗（豊山派）長谷寺は確実であろう。ただし「第一次三十三ケ所各霊場ヲ中心トシテ其ノ霊場ニ近接セル地域ニ更ニ三十三霊場ヲ漸次設定スルモノトス」とされ、「霊場ハ現ニ観世音菩薩ヲ奉安スル歴史由緒正シキ霊刹大寺ヲ以テ之ニ充ツルヲ本則トシ新ニ新霊場ヲ建設スルモ佳シ。政治交通文化ノ中心地及其レニ近接セル権威アル霊刹タルコト」[42]（傍点筆者）とある。既存の名刹をもとに、新たな巡礼霊場を設定することが目的であった。

詳しく見ると、『中外日報』には気になる記述がある。「霊場は、満洲を初め各地域別に夫々三十三箇所を設定することに改められ、大東亜をして精神的な楽土たらしめる基礎となることとなつた」[43]（傍点筆者）とある。つまり、大東亜観音讃仰会の当初計画は、大東亜全域を巡礼する三十三霊場の設定であった。その後、その一か寺を中心として周辺地域を対象とする霊場建設に変更となった。単純計算すると大東亜全域で一〇八九（三三×三三）の霊場を構想するかに見えた。しかし余りに広大で、実情はひとまず各地域の中核寺院をもとに観音霊場を設定する妥協策となった。その理由として、観音信仰による「大東亜」の結合は、霊場巡礼という日本的な色合いが強いゆえ、その地域の宗教文化を無視した形となり、事業の完遂は単純には進まなかったのである。

（3）満洲側との交渉

大東亜観音讃仰運動について、讃仰会主事の壬生照順は、「何といつても満支を始め、大東亜共栄圏の宗教運動として強力な組織化をしなければならぬ。このためには大東亜の識者、指導者をしてこれを理解せしめることが先決問題である」[44]とした。大東亜仏教青年会の総本部からの了解により、一九四三（昭和一八）年七月一五日、大阪の天台宗四天王寺（現・和宗の総本山）にて、大東亜仏教青年大会での分科会である霊場海外設定委員の協議が行われ、終了後の同日に大会の解散式を行った。浅草寺の塩入亮忠らは海外代表に対して、重ねて本運動の趣旨を徹底するため詳細に説明した。実は、仏青大会では観音霊場の建設が承認されたが、実際には各地域代表に温度差があり、理解を得るのに困難を極めたからである。

満洲国からの派遣団は、特に「本運動に対して積極的な熱意を示」[45]したという。大会の終了後、満洲の青年仏徒代表一三名は、同年七月一七日に、滋賀の比叡山延暦寺に登り、山上の宿院において全満洲での観音讃仰運動を促進させるため協議が開かれた。現地から引率した坂井栄三郎が座長となったが、坂井は、満洲の官制国民組織である協和会の教化部職員にして、東洋大学でインド哲学を学び、新義真言宗智山派の僧籍があることから適任者であった（当時は真言宗に一派合同。僧名は栄信）。壬生が出席して詳細な説明を行い、満場一致で左の事項を決議した。『中外日報』によれば、「諸事項は長老禅定法師の熱烈な叫びによつて一同心から共鳴し、帰国の上は実践に着手することとなつた」[46]という。

一、満洲国には従来統一ある信仰がない。観音像はどこの寺院にもあり、全満洲を代表する信仰と認められる故、これによつて信仰の統一を期し、各寺院の縦の連絡をとり、三十三霊場を設定して、全満の仏教が真に一体的活動をするよう促したい。

二、各寺院に観音像を祀り、新京を中心に、大都市や激戦地（ノモンハン等）に新霊場を作り、供養塔を

建立し、遍路行によつて信仰を深め、横の連絡をすゝめたい。

三、従来の満洲仏教は僧侶だけのものであつた。今後は観音信仰を中心に在俗信者をよびかけ、僧俗一貫の全満民衆信仰運動を展開する。

四、従来の満洲仏教は青年を顧みなかつたが、今後は青年仏徒によびかけ、これを組織化して仏教青年運動を促進したい。

五、各代表の住する寺院に於て先づ右の趣旨に基く実践を始める。(47)

とはいえ、満洲側の円滑な事業実施は、困難であった。一九四四年八月までに、各地の霊場を選定する海外委員に次の人物が就任した（表3）。(48)満州の委員のうち、肩書はあるが人名無記が複数あるのは、本人の承諾が得られないからであろうか。一九四三年七月時点では、満洲は釈禅定（満

表3　大東亜観音讃仰会の海外委員名簿

満洲国霊場設定委員	無記（委員長・満洲国仏教総会長老）、無記（新京市長春大街満洲仏教総会）、無記（巌寺悦衆長老秘書）、無記（祖師廟住持）、無記（満洲国仏教総会支部長）、無記（新京市長春大街満洲仏教総会）、無記（新京市長春大街満洲仏教総会）、無記（万寿寺副講）、無記（大乗寺住持）、景印涵（満洲国仏教総会常任幹事・新京市長春大街満洲仏教総会）、遠藤清香（満洲国仏教総会常任幹事・新京市長春大街満洲仏教総会）、老布倉葛節（喇嘛学校教師）、阿旺敦魯布礼木蘇（阿貴圏廟葛根）、伊藤琢朗（満洲国教化司礼教化事務官）、坂井栄三郎（満洲帝国協和会中央本部文化部教化班）、王崇岳（満洲帝国協和会中央本部文化部教化班·居士·通訳）、祷正己（満洲国通信社記者）
中華民国華北霊場設定委員	周叔迦（委員長・仏教同願会常務理事・中国仏教学院院長）、顕宗（仏教同願会理事・北京弘済寺住持）、丁文（仏教同願会秘書）、仁道（中国仏教学院教務長）、宇光（北京法源寺仏学院学監・北京法源寺仏学院）、応脱（中国仏教学院学員）、修明（中国仏教学院学員）、竹田淳照（真宗大谷派）
中華民国華北霊場設定委員	仁山（委員長・中国仏教会結成委員長・観音閣住持、鎮江金山大観音閣）、慧光（湖北省仏教会長・三仏講寺住職・武昌興亜路）、東初（蕪山仏教学院学監・定慧寺監印・鎮江金山）、超澄（上海仏学教師・三峯寺監院・上海檳榔路玉仏寺）、僧曇（蘇州日華仏教会理事・永定寺住職・蘇州東海島承天寺）、本明（南京大報恩寺住職）、葛恵芳（上海中支宗教大同連盟職員）、藤実正憲（中支中支宗教大同連盟総主事）、浄慧（龍谷大学留学中）
中華民国華南霊場設定委員	鉄禅（委員長・広東六榕寺住職）、謝為何（居士）、釈会覚（厦門大乗仏教会副会長・南普院寺主事兼閩南仏学院院長）、黄慧燈（厦門大乗仏教会秘書）、神田慧雲（厦門大乗仏教会常務理事・東本願寺開教使）

洲国仏教総会長老）の代表就任の内諾があったが、一年後には記載されていないのは、仏教総会で人事異動があっただろう。満洲仏教界の内部では、対日協力の姿勢が交錯していたことを示すものである。[49]

（4）満洲と華北の三十三所霊場

一九四三（昭和一八）年秋の報道によれば、主事の壬生照順が、満洲国三十三所霊場の建設で動いていた。壬生は同地へ出張して、満洲国仏教総会において同国政府事務官の伊藤琢朗、協和会の坂井栄三郎などの同会理事と協議した。そして、「満洲国建国十周年を記念として曩に首都新京〔現・長春〕に建立せられたる造福観音を第一霊場として明〔昭和〕十九年五月には満洲国側の希望によつて浅草寺貫主大森亮順氏が渡満その記念法要を修する他、営口、奉天を初め各洲に三十三霊場を建設する事を取り決め」[50]たのである。

続く一九四四年には、「満洲霊場第一番新京造福廟は去る八月八日盛大な開眼式を修行したので九月中旬同会主事壬生照順氏を満洲国、中北支に派遣し、十一月末まで各地を歴訪せしめて霊場建設の準備を進め」[51]たという。讃仰会では、「顧問小磯大将の首相親任、山田〔乙三〕大将の関東軍司令官赴任を機として、更に一段の活動を進め、特に朝鮮満洲、北支等の霊場建設を積極化」[52]させたのである。

注意すべきは、造福観音は、讃仰会ではなく、満洲国側の事業であった。讃仰会は、あくまで観音霊場のネットワーク構築が目的である。造福観音は、国務総理の張海鵬を建設委員長として、首都新京の大同広場の東にある護国般若寺に建立された。総工費は一七万余円で尊像は鋳造質蓮座ともに一丈八尺（約五・五メートル）で、鉄筋コンクリート造の台座を合わせれば、三丈六尺（約一〇・九メートル）であった。工費の内三万円は、日系の仏教者が負担することになり、既に各宗派からの負担で大日本仏教会が三〇〇〇円を拠出したという。[53]

華北三十三所霊場でも、建設の具体策が進んだ。一九四四年一〇月に、対日協力組織である華北政務委員会（元・中華民国臨時政府）内務総署からの招請で、長谷川良信（浄土宗僧侶・大正大学教授）、高神覚昇（真言宗僧侶・大正大学教授）、浜田本悠（日蓮宗僧侶・立正大学教授）が、大東亜省の嘱託として北支に派遣された。中国仏教の現状を視察し、北京では、拈花寺、広済寺、柏林寺、華北居士林、仏教同願会等を訪問して、関係者と懇談した。北京大学や各仏教学院では仏教思想講演会を開催したという。「中国仏教界をして華北三十三ケ所の観音霊場設立を決定せしめたるは今回三氏滞支中の括目すべき結実」[54]であった。

特に仏教同願会では、一〇月二二日には王揖唐（華北政務委員会元委員長）など二〇名と懇談会を開いた。この席上、長谷川の提案で「観音霊場三十三ケ所を設けお札所にしたらどうか」[55]との話を出したところ、王らの賛成で即日に決定したという[56]。二番以降の霊場の詳細は不詳である。

おわりに

昭和戦時期に活動した仏教系の奉賛会及び賛仰会について、第一に日華親善楔観音奉賛会、第二に大東亜観音讃仰会の組織と活動を見てきた。いずれの団体も、戦争末期に始動したことから、活動時期は短く敗戦を迎えた。宗教活動を賛助した事業とはいえ、「大東亜共栄圏」建設の国策に協力した政治的な目的を含んでいたことが明らかとなった。

日華親善楔観音奉賛会は、観音堂の本格竣工なく設計図が残されたまま、対アジアの文化工作を目指すことなく途絶した（図3）[57]。大東亜観音讃仰会では、当初はアジア全域にわたる大東亜観音三十三霊場を構想した

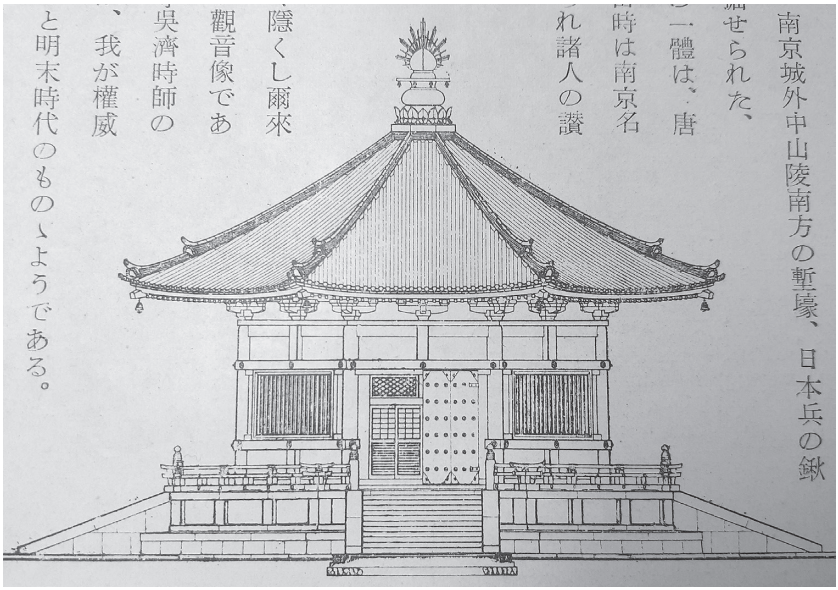

図3　本設建物を想定した日華親善楔観音堂の設計図。仮設建物のまま着工せず

が、三十三の霊場計画は当初から後退して、まずは満洲と華北という地域限定の霊場策定となったのである。奉賛会による観音信仰を用いた対アジア活動は、両団体に限らなかった。日本仏教鑽仰会（会長柳原義光、理事長中山理々）では、一九四四年六月に、満・中・泰・ビルマの在京の各大使を帝国ホテルに招待して観音像の掛軸を贈呈したという[58]。本論の要点として、慈悲の精神に基づく観音信仰の霊場と図像は、日本と「大東亜」をつなぐ、民間外交と仏教文化工作のアイテムとなったことを指摘したい。

しかし本論での二つの事例とも、大乗仏教に共通する観音信仰は、日本仏教の文脈に置かれた観音であるため、アジア的な広がりを得られることができなかった。それは、宗教者側に、日本仏教からアジアへの優越意識があったからである。例えば大森亮順の発言を見ると、大東亜観音讃仰会を設立したのは、「東亜一帯に亘り、戦災に悩むであらう衆生の為めに、現当二世を救済せんとの大願に基いた」も

ので、霊場建設は、「菩薩誓願の発動地とし、斯くて各々其の方面の衆生をして、大慈悲に浴せしめんとするのが目的」であり、「人類の真の平和と幸福とを実現しやうという、高遠正大な理想」があったという[59]。大森は、一九三九年に北京での仏教同願会の年会に参加するなど、戦時下での日本と中国の友好を模索していた。讃仰会の活動は、宗教者として慈悲心でアジアを救済する高邁な理想は理解できるが、あくまで占領者側と被占領者側の力関係が内在していた、戦争という時代の特質と限界であったのである。

戦後に、「大東亜」の観音霊場が、過去の記憶から蘇生するかに見えたことがあった。旧・新京にあった満洲観音三十三霊場の第一番の造福観音をめぐって、中華人民共和国吉林省の長春市人民政府は一九九一年八月に、軍国主義を象徴するゆえ、再建を禁止する命令を出した[60]。公文書によれば、日本という名指しは避けたが、外国の一部勢力から復興を図る動きがあるとして、地方政府が事前に再建を阻止したという。観音信仰は、中国で広く浸透するといえども、戦争に起因して誕生した造福観音は、受け入れられなかったのである。

註

（1）増山太郎編著『聖徳太子奉讃会史』（永青文庫、二〇一〇年）。拙著『戦時下に日本仏教と南方地域』（法藏館、二〇一五年）所収の第三部第一章「真如親王奉讃会とシンガポール」。

（2）李世淵「日本社会における「戦争死者供養」と怨親平等」（東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻博士学位論文、二〇一二年）では、大東亜観音讃仰会が言及されるが、筆者は未見である。後に、李世淵（이세연）『사무라이（侍）의 精神世界와 佛教―日本社會의 戦死者供養과 怨親平等』（ソウル：慧眼、二〇一四年）として、韓国語で出版される。君島彩子『観音像とは何か―平和モニュメントの近・現代』（青弓社、二〇二一年）でも、大東亜観音讃仰会について言及する。

（3）日華親善楔観音の来歴は、主に小磯国昭著・小磯国昭自叙伝刊行会編『葛山鴻爪』（同会、一九六三年）、「黄之巻　一」

の「麻溪庵と観音堂」（七二三～七四七頁）を参照した。同書は、敗戦後に連合国国際軍事裁判所でA級戦犯の終身禁固刑の判決を受け、巣鴨拘置所において小磯が執筆した。

（4）坂井田夕起子『誰も知らない『西遊記』――玄奘三蔵の遺骨をめぐる東アジア戦後史』（龍溪書舎、二〇一三年）。

（5）前掲、小磯国昭『葛山鴻爪』、七三四頁。

（6）前掲、小磯国昭『葛山鴻爪』、七三八頁。

（7）前掲、小磯国昭『葛山鴻爪』、七七頁。

（8）無署名「日華親善楔観音の由来」（『宗教公論』第一三巻第五・六号、宗教問題研究所、一九四四年六月）、五頁。

（9）前掲、小磯国昭『葛山鴻爪』、七三三頁。小磯は神仏を拝んだが、同書には他宗教を理解を示したした記述が随所にある。例えば、小磯は第一二師団参謀として一九一八年のシベリア出兵に参加したが、師団の英語通訳が日本ユダヤ同祖論の酒井勝軍であった。「鼻つぱしの強い痛快な人だなと思つた。……酒井君は特色を帯びたクリスチャン」（三六八、三七〇頁）と記す。

（10）金的「教界情報／南京出土観音　芝公園に立つか？」（『宗教公論』第一一巻第三号、一九四二年三月）、三四頁。

（11）前掲、小磯国昭『葛山鴻爪』、七三九～七四〇頁。

（12）無署名「日華を結ぶ楔観音　大陸の戦場から芝増上寺へ」（『朝日新聞』第二〇八九〇号、朝日新聞東京本社、一九四四年五月一五日）、二頁。

（13）無署名「日華親善楔観音入仏式」（『中外日報』第一三四一六号、中外日報社、一九四四年五月一五日）、二頁。浄土宗増上寺所蔵、大日本仏教会史料、「未決書類（ビルマ国寄還仏舎利ノ件・日支親善楔観音ノ件・公葬祭ニ関スル件）」（分類番号・大―五―一二五）に含まれる、書類「日華親善楔観音堂入仏式次第（昭和十九年五月十四日午前十時）」。大日本仏教会史料は、増上寺史料編纂所編『増上寺史料集　附巻』（増上寺、一九八三年）に目録が掲載。

（14）前掲、無署名「日華親善楔観音の由来」、五頁。

（15）前掲、「未決書類」に含まれる、書類「ラジオ放送記事原稿―「日華親善楔観音堂入仏式」ノ状況」。

（16）前掲、「未決書類」に含まれる、書類「申合事項案」（一九四四年五月〔空欄〕日、署名者・財団法人日華親善楔観音奉賛会総裁小磯国昭、浄土宗大本山増上寺住職大島徹水、財団法人大日本仏教会会長酒井日慎、立会者・文部省教学局宗教課長吉田孝一）。

(17) 前掲、「未決書類」に含まれる、書類「申合事項案」。
(18) 前掲、「未決書類」に含まれる、書類「祭文」（一九四四年五月一四日）。名義は「日華親善楔観音奉賛会　代表　小磯国昭」。
(19) 前掲、小磯国昭『葛山鴻爪』には、増上寺境内の「観音堂も幸に五重塔……と共に戦災を免れた」（七四五頁）とあるが、五重塔は空襲で焼失したので、現存する三解脱門の誤記であろう。
(20) 「法人設立許可取消処分公告」（『官報』第三五二八号、財務省印刷局、二〇〇三年一月二一日）、一二頁。
(21) 小笠原長生『観音物語』（春陽堂、一九二六年）、同『花ふゞき』（三幸堂書店、一九三五年）所収の「予が入信の動機―子爵より寄進された千手観音図」、同『皇国に於ける観世音の信仰』（和光社、一九三八年）。なお、同『小笠原長生全集』（全八巻、平凡社、一九三六～一九三七年）に、観音関係論考の一部が再掲。
(22) 小笠原長生「大東亜観音讃仰会の提唱」（『観世音』第七巻第五号、観世音世界運動本部、一九四三年六月）、一頁。
(23) 小笠原長生「大森亮順上人を懐ふ」（浅草寺編『大森亮順大僧正』浅草寺、一九五一年）、三八～三九頁。
(24) 「大東亜諸民族を観音信仰に結ぶ／大東亜三十三霊場を選定／けふ、讃仰会発会式」（『中外日報』第一三一三九号、一九四三年六月一二日）、二頁。
(25) 前掲、「大東亜諸民族を観音信仰に結ぶ」、二頁。
(26) 前掲、「大東亜諸民族を観音信仰に結ぶ」、二頁。
(27) 「大東亜観音霊場設立趣旨」（『観世音』第七巻第七号、一九四三年八月）、表紙裏。
(28) 大東亜仏教青年大会については、中西直樹「戦前期における仏教国際大会の変遷」（中西直樹・拙編『戦時下「日本仏教」の国際交流』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書一一、不二出版、二〇一九年）を参照。
(29) 大東亜仏教青年会編『大東亜仏教青年会並大日本仏教青年会要覧』（大東亜仏教青年会、一九四四年）、二八頁。復刻版は、龍谷大学アジア仏教文化研究センター「戦時下「日本仏教」の国際交流」研究班編『資料集・戦時下「日本仏教」の国際交流』第二期第五巻（不二出版、二〇一六年）に収録。
(30) 壬生照順「大東亜観音讃仰運動の進展」（『観世音』第七巻第六号、一九四三年七月）、一～三頁。
(31) 無署名「全国の百霊場で一斉に必勝祈願／大東亜観音讃仰会創立総会／観音讃仰」（『中外日報』第一三四三三号、一九四四年六月四日）、二頁。同「観音様が結ぶ大東亜」（『朝日新聞』第二〇九一八号、同年六月一二日）、朝刊二頁。同「観音鑽仰会の祈願会」（『読売報知』第二四二二一号、読売新聞社、同年六月一二日）、朝刊二頁。同「百霊場一斉に必勝祈願／大

東亜観音讃仰会総会と披露」（『中外日報』第一三四四一号、同年六月一四日）、二頁。

（32）「大東亜観音讃仰会設立趣意書」（『興亜の光』第一巻第五号、「大東亜観音讃仰会創立総会記念特集号」、一九四四年八月）、一三～一四頁。

（33）前掲、「大東亜観音讃仰会設立趣意書」、一五～一六頁。

（34）前掲、「大東亜観音讃仰会設立趣意書」、一六～一八頁。

（35）上村真肇「大東亜諸地域観音霊場大観」（『観世音』第七巻第五号、一九四三年六月）、四頁。

（36）上村真肇「泰国盤谷国立図書館所蔵　現存和漢文献一覧目録」（『大正大学々報』第三三巻、大正大学、一九四二年五月）。同「大東亜の新しき信　バンコックで拝んだ観音様　上・下」（『中外日報』第一三〇四八、一三〇四九号、一九四三年二月二三、二四日）、一、一頁。

（37）前掲、上村真肇「大東亜諸地域観音霊場大観」、四～五頁。

（38）前掲、上村真肇「大東亜諸地域観音霊場大観」、五～一一頁。

（39）前掲、上村真肇「大東亜諸地域観音霊場大観」、四頁。

（40）現在の大韓民国にある「韓国三十三観音聖地」は、旧植民地時代から存在するものではない。大韓仏教曹渓宗韓国仏教文化事業団と韓国観光公社の共同で、日韓観光交流年の二〇〇八年に創始した。

（41）無署名「共栄圏内に観音霊場　三十三ケ所設定」（『中外日報』第一三一六〇号、一九四三年七月七日）、二頁。

（42）前掲、「大東亜観音霊場設立趣旨」、表紙裏。

（43）無署名「満洲国の観音讃仰運動／大東亜全域に観音霊場を」（『中外日報』第一三一七四号、一九四三年七月二三日）、二頁。

（44）前掲、壬生照順「大東亜観音讃仰運動の進展」、二頁。

（45）前掲、壬生照順「大東亜観音讃仰運動の進展」、二頁。

（46）前掲、「満洲国の観音讃仰運動／大東亜全域に観音霊場を」、二頁。

（47）前掲、壬生照順「大東亜観音讃仰運動の進展」、二～三頁。

（48）前掲、「大東亜観音讃仰会設立趣意書」、一八～一九頁。

（49）前掲、「満洲国の観音讃仰運動／大東亜全域に観音霊場を」、二頁。

（50）無署名「満洲国観音霊場創設進捗す」（『中外日報』第一三二六〇号、一九四三年一一月三日）、二頁。

(51)「大東亜各地に観音霊場建設」(『中外日報』第一三四九〇号、一九四四年八月一六日)、二頁。
(52) 前掲、「大東亜各地に観音霊場建設」、二頁。
(53) 無署名「満洲国首都、大同広場に／慈眼視衆生の造福大観音像竣る／ちかく開眼式　張る国務総理の奉建縁起」(『中外日報』第一三二〇六号、一九四三年八月二九日)、三頁。『南瀛仏教』第二一巻第一〇号(台湾仏教会、一九四三年一〇月、二八～二九頁)にも転載。
(54) 無署名「生かす観音信仰／華北に卅三霊場選定」(『中外日報』第一三二六二号、一九四三年一一月六日)、二頁。
(55) 前掲、「生かす観音信仰／華北に卅三霊場選定」、二頁。
(56) 無署名「後記」(前掲、『興亜の光』第一巻第五号)、一九頁。
(57) 水野梅暁編『日本文化与中国先賢』(大日本仏教会、一九四二年)、一〇八頁。
(58) 無署名「共栄圏大使へ観音像」(『朝日新聞』第二〇九一〇号、一九四四年六月四日)、三頁。
(59) 前掲、小笠原長生「大森亮順上人を懐ふ」、三八～三九頁。
(60) 公文書、長春市人民政府弁公庁「長春市人民政府関於堅決禁止重建原〝造福観音霊場〟的通告」(「長春市人民政府文件」長府発〔一九九一〕六二号、一九九一年八月)。なお台湾花蓮の和南寺(一九六七年傳慶和尚開基)には、造福観音(一九八二年開眼)があるが、本論で述べた満洲の造福観音とは関係がないと見られる。

(武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員、文化庁宗務課専門職)